

セイセキ ZINE とは？

セイセキ ZINE (セイセキジン) は毎月1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャーする、市民参加型ローカルマガジンです。多摩市在住の有志の市民ライターを募り、セイセキ愛に満ちた誌面づくりをしています。

#5

セイセキ ZINE

聖蹟人

聖蹟桜ヶ丘 "People" ガイド

theme
育む人
その想いを大切にしよう。
聖蹟桜ヶ丘には
育み育まれる、あたたかな冬がある。

Take Free

BALL × 京王電鉄

We love SEISEKI



住宅街に点在する畑でジャガイモやトマトなど16種類程度の野菜を減農薬で栽培。質の高い堆肥を用い、採れたての農作物を聖蹟桜ヶ丘いきいき市、多摩市内の学校給食センターなどへも出荷している。

2014年に多摩川河川敷で行われた「Drink out! 多摩クラフトビールフェア」内で、第1回せいせき・ファーマーズミーティングを開催。その後、自家焙煎コーヒー専門店「tak beans」にて「seiseki ASAICHI」「You gotta ICHI」を不定期開催。

SEISEKI PEOPLE

1 対談: つくる人、届ける人

2 舞台は多摩市、地元愛が深まる「おいしさの育み方」

多摩市関戸で農家を営む藤井睦夫さん(写真右)と、聖蹟桜ヶ丘を中心に活動する「Seiseki farmers meeting」の城田恵子さん(左)。二人がそれぞれに向き合っている地域への眼差し、おいしさの育み方とは？

Interview、Text : Akira Andoh

地元の野菜はおいしくて すごくおもしろい！

— 城田さんや『tak beans』の松崎さんら有志が集まった地域の方たちが『tak beans』の中に『seiseki ASAICHI』という

小さなマルシェをつくり、月1回のペースで地元農家の野菜や地域の物産を販売していますよね。藤井さんと城田さんお二人の最初の出会いの話から聞かせてください。
藤井「当時、僕の知人を介して城田さんが自宅に来てくれて『藤井ファームのお野

菜もいかがですか？』と声をかけてくれたことが、つながりを深めるきっかけだったと思います」
城田「さまざまなご縁に恵まれ、藤井さんと出会うことができました。生産者さんの顔が見える安心安全な野菜を地元の方々

にも知ってもらいたい。地元のことを知ることが住んでいるまちへの愛着につながる。そんな想いから2014年に『Seiseki farmers meeting』を立ちあげ、聖蹟桜ヶ丘を中心に活動するようになりました。藤井さんをはじめ、地域の農家さんたちと多く知り合えたことが、自分にとっての宝だなあと感じています」

— 城田さんはなぜ、『Seiseki farmers meeting』を始めようと思ったのですか。
城田「2012年に、米・オレゴン州ポートランドに訪問する機会があって、現地の大学のキャンパスや川沿いなど、さまざまな場所でファーマーズマーケットが開催されていたんです。色とりどりの地元の野菜が、ラッピングされずにそのまま並べられていて、それを地元の人が買いにくる。マーケットには人が集まるから、大道芸人やミュージシャンも来たりして、小さなにぎわいの場になっている。そういう様子ですごく自然で、地元のものを買おうという地域の人たちの意識を感じました。あらためて自分の地元の多摩市を見回してみたら、『あれ？畑もあるし、地元の野菜もある……自分が住むまちでもやってみよう。出会いの場で

もある“市”をつくりたい!』と思ったんです」
藤井「地域で採れた野菜を地域住民のために販売するっていう発想、豊かだなあと感じていました。草の根ですけれど、農家を営む僕らの存在を知ってもらえる、とても広がりのある活動だなと。農業をやるからには楽しみながら日々を過ごし、自分たちがつくった農作物を地域の食卓で食べてくれていると思うと、やっぱりうれしいじゃないですか。さまざまな活動を通して、そんな僕らの気持ちにも寄り添ってくれている気がします」

— お二人それぞれの話を聞いてると、聖蹟桜ヶ丘っていいまちだなあと感じます。
藤井「昔といまを比べると、まちの顔つきは変わったけれど、地域に対しての愛が深い人は多いかもしれませんね。城田さんもそう。地元愛ってうのかな。まちを良くしたいっていう想いがないと、市民が中心となって活動するイベント事につくれなものだから。だからできる限り、さまざまな活動を応援したいと思っています。だってほら、地域の皆さんが楽しいほうがいいじゃんっていう(笑)」
城田「地域で活動していると、多くの方

が応援してくださったり、ご縁をつないでくださったりするんです。『一緒にやりたい!』と手を挙げてくれる仲間との出会いも多くありました。コロナ禍以降、『seiseki ASAICHI』の活動はだいぶゆっくりとしたペースになっていますが、これからも自分らしいペースで出会いの場になる“市”をつくっていければと思っています」
藤井「農業は、頑張っている自分が楽しんでこそ、だと思えます。地域の皆さんとのつながりを深めることができれば、うれしい。そのための活動に注目してください!」

藤井ファーム 藤井睦夫さん

鎌倉時代から多摩市関戸に根づく藤井家の農家を継ぎ、藤井ファームを営む。2008年に市役所を早期退職し、15～16種類の野菜を質の高い堆肥を用い、栽培。地域の店舗や学校へ出荷中。

Seiseki farmers meeting 城田恵子さん

スタジオ・ソラ 一級建築士事務所 代表。ポートランド視察の経験から地元農業に関心を抱き、2014年よりSeiseki farmers meetingを主宰。地元の生産物や加工品を地域に紹介する活動も展開中。

すくすく育つ、ちまちまっとカワイイ子♡ 暮らしに彩りを添える 「多肉植物のABC」

セダムの世界にハマって4年。好きが高じて自宅の軒先に
多肉植物専門店をオープン。LOVEのわけは？

Interview、Text：Chika Ito / Photo：Yufumi Omori



オープン日は基本、無人販売だが、在宅中は自ら接客する。「お店に来てくれた方々に選び方、育て方などを伝えたりすることも楽しみのひとつです」

多肉植物 ちまちま屋

“セダムマニア”の店主・松田さんが趣味で育てたり仕入れた多肉植物を自宅で無人販売する「多肉植物 ちまちま屋」。販売は草系のセダム中心。毎週日曜に翌月曜からの営業情報をGoogleMap、Instagram、LINE公式アカウント等で発信中。

📍 多摩市連光寺 1-16-66

☎ 090-5338-1237

📱 お店と店主のサイト総合案内はコチラ！



3 PEOPLE SEISEKI 松田花枝さん

「多肉植物 ちまちま屋」店主。多肉植物屋さんではちょっと珍しいセダムマニアさん。連光寺在住歴20年。イリオモテヤマネコの研究など趣味多数。

セダムの“深遠なる魅力”を 多くの人に知ってほしい

聖蹟桜ヶ丘駅から20分ほど歩いて連光寺の住宅街へ入っていくと、小さな植物に囲まれた一軒家がある。ここは「ちまちま屋」という多肉植物の専門店。店主の松田花枝さんは20年近く連光寺に住み、2020年10月に多肉植物と運命の出会いを果たす。翌年の初夏、自宅の前のスペースで無人販売の多肉植物店を始めた。

専門に扱うのは「セダム」という品種の多肉植物。松田さん自身は約200種類の多肉植物を育て、店には約50種類が並ぶ。初めて育てたミルクウージーがきっかけでセダムにハマリ、日本原産の多肉植物にも力を入れている。セダムは寄せ植えの隙間を埋める脇役に扱われることが多いそうだが、「多種類のセダムが集まれば主役になれる。ちまちまして可愛らしいフォルムに目を向けてくれたらうれしいです」と松田さん。

楽しみ方はさまざま。乾燥地域が原産の植物ということもあり、どれも葉に水を蓄えてぷっくりと厚みがある。鉢でも庭でも育てることができ、長く伸びたら切り、切った枝を土に挿せば根が出て増やせる。多肉植物について、「好き勝手暴れて育てても可愛い」と笑顔を覗かせる。強い生命力も愛好家を虜にする理由のひとつだ。

聞けば松田さん、農学部で造園学を学び、植物を扱う会社で働いていたこともあり、植物学的な視点から多肉植物を視るのも好きだそう。多様な文献から多肉植物のことを日々学び、その研究成果はSNSをはじめ、積極的に情報発信中。自宅の軒先で販売しているのも、来てくれたお客さんにどんな環境で育てているのか知ってもらうためだそう。松田さんが手がけた庭はどこか幻想的で見ているだけで癒やされる。

ここ「ちまちま屋」から多肉植物の魅力が発信されている。あなたも多肉植物という小さな可愛い家族を迎え入れてみては？

セイセキ歴史 Walk #4

古写真でむかし語り

—聖蹟桜ヶ丘駅と付近の様子—

生まれも育ちも関戸。観光を通じたまちづくりに尽力してきた森田利夫さんはまちの変化を見続けてきた人。聖蹟桜ヶ丘駅の高架化(昭和44年)頃の話聞いてみた。



1 昭和45年8月 航空斜写真 聖蹟桜ヶ丘駅周辺



2 昭和44年4月18日の聖蹟桜ヶ丘駅



3 昭和44年1月の聖蹟桜ヶ丘駅



4 昭和44年1月推定 聖蹟桜ヶ丘駅の高架化工事



5 昭和43年頃の聖蹟桜ヶ丘駅

1. (UR都市機構寄贈・公益財団法人多摩市文化振興財団所蔵)
2. (南多摩新都市開発本部関係資料・公益財団法人多摩市文化振興財団所蔵)
3. (南多摩新都市開発本部関係資料・公益財団法人多摩市文化振興財団所蔵)
4. (南多摩新都市開発本部関係資料・公益財団法人多摩市文化振興財団所蔵)
5. (新倉勇造氏撮影・公益財団法人多摩市文化振興財団協力)

まちに歴史あり。駅の北側に畑や水田が広がる、のどかな時代でした。

「懐かしいねぇ。聖蹟桜ヶ丘駅が高架化したのは昭和44年だから、いま見ているのはその頃に撮った写真ってことだね」
柔らかな口調で話すのは森田利夫さん。82歳、聖蹟桜ヶ丘の“まちの変化”を小さな頃からずっと見続けてきた人だ。こんな話が続く。
「いまのまちの様子しか知らないと思像できないかもしれないけれど、昔は駅の北側に畑や水田が広がり、多摩川の河川敷も整備されていなくて水量も多かった。夏になると川にスイカを持っていき、泳ぐのが日常の光景でした。私が生まれたのは昭和

17年で、昭和20年代に少年時代を過ごしたわけだけど、当時は冬になると空き地に水を撒いてスケートをして遊ぶこともあったなあ。駅前に空き地があってそこで盆踊り大会があったり、いつだったか……木下大サーカスが来たこともあったよ」
時計の針は進み、聖蹟桜ヶ丘駅は昭和44年5月末に高架化。写真2は高架化1ヵ月前の駅ホームと改札、写真3は現在の駅東口の聖蹟Uロード付近で撮影されたものだ。「当時は駅の周辺に個人商店が多くありました。商店街の店主たちの顔が見える時代でしたね。私は家業を継いで八百屋

をしていました。現在のよう賑わいではなかったけれど、店主とお客さんとの距離が近かったので商売をしていておもしろい時代でしたね」

まちに歴史あり。その後、時間をかけながら聖蹟桜ヶ丘は現在へとつながっていく。



森田利夫さん

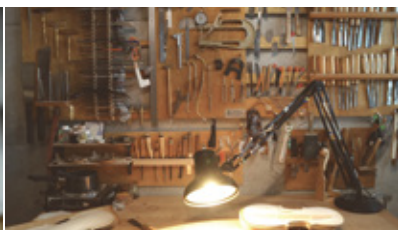
1942年生まれ。多摩第一小学校、多摩中学校を経て、現在まで関戸在住。せいせき観光まちづくり会議、中央商店会・理事。これまで商店街、消防団、青年会議所メンバーとしてまちを盛り上げ、「せいせき桜まつり」の立ち上げにも携わる。

一人ひとりの声に耳を傾けたい

ONE & ONLYと向き合う、 「和田の楽器カウンセラー」

アニメ映画『耳をすませば』の聖地と言われるまちに、あの“天沢聖司”を
思わせるバイオリン職人がいる。理想の音を追求する姿に迫ってみた。

Interview、Text : Momoyo Yuge / Interview : Akiko Katayama / Photo : Yufumi Omori



工房には道具が並ぶ。現在、ジブリパーク青春の丘
“地球屋”バイオリン工房の監修、楽器製作を担う。

大樹バイオリン工房

多摩市和田 1920-5 アトリエ 204
10:00 ~ 19:00 定休日：火
080-5080-3851
※完全予約制
<https://www.okiviolinworkshop.com>

SEISEKI PEOPLE 4

藤井大樹さん、汐里さん
バイオリン、ヴィオラ、チェロ
の製作・修理・調整を行う「大樹
バイオリン工房」の代表兼バイ
オリン職人の大樹さんと、チェロ
を担当する奥様の汐里さん。

お客さまが求める音に できる限り、近づきたい

藤井大樹さんの職業欄はバイオリン職人。奏者でなくても、製作やリペアなど何かバイオリンに関わる仕事に就きたいと思い、“バイオリン職人のまち”と評されるイタリア・クレモナへの留学を決めた。当時 18 歳。異国に暮らす怖さはなかった。「若さゆえのってやつですね。現地の国立弦楽器製作学校に入りました。学校では、手取り足取り教えてくれるわけではなく、先生がやっているのを見て目で盗むという感じでした。先生とどれだけ仲良くなるかも重要で、先生の機嫌がいいと授業以外にも声をかけてもらえたりするんです」

留学は 8 年間。ゴールのない世界で研鑽を積み、卒業後は製作・修理アシスタントとして働き、師匠となるマエストロと出会うこともできた。

「大切なのは学び取る意欲。バイオリンは芸術品と見られがちですが、そもそも音をつくる道具という意識が芽生えましたね」

帰国は 2014 年。2 年間専門学校で教鞭をとり、2017 年に多摩市和田にバイオリン工房を開いた。インタビュー中、「バイオリンづくりをする上で自分のこだわりは不要です」と話す藤井さん。

「お客さまのこだわりを実現するために僕たち職人のこだわりは必要ありません。それよりも、弾きやすく壊れにくく、奏者の求める音を鳴らせること。製作に取り掛かる前のコミュニケーションで奏者の理想を探り、さまざまな資料やお客さまの演奏を基に形をつくっていきます」

求める音にいかに近づけられるか。丁寧に言葉を選びながら話す藤井さんを知ると、誠実さが伝わってくる。

「一生勉強ですね。その勉強が嫌じゃないので天職なのかもしれません(笑)」

飽くなき探究心、彼の感性に惹かれて今日も国内外からオーダーが届く。

オーガニックなつながりを育みたい

人と人をむすび、輪を育む 「セイセキのサードプレイス」

SEISEKI PEOPLE 5

大栗川に面し、せせらぎと緑が心地よい「おむすびカフェ くさびや」。食・音楽・アート・古着が集まる和やかな場所を育む、店長の来住野加奈さんに話を聞いてみた。

Interview、Text、Photo: Tamaki Onda



来住野加奈さん

「おむすびカフェ くさびや」
店長。多摩市内にある自宅からお店までは自転車で 10 分。音楽と古着が大好き。



店内に入ると、来住野さんが毎日腕を振るってつくる週替わりのおむすび定食が迎える。食事をしながらゆっくりと読書や仕事もできるカフェスペースのほか、古着やアート作品、雑貨も販売中。

さまざまなイベントを随時、開催中!



写真は 2024 年 9 月 23 日に開催した「くさびや オクトーバーフェスト スペシャルライブ」の様子。「くさびや」ではライブイベントほか、趣味について語り合う「話そうよの会」なども開催。

「宇宙一好きなお店」を引き継いだ、みんなの憩いの場

現在、「おむすびカフェ くさびや」がある場所には 2021 年 3 月まで「マメトラ」という古着とデリカテッセンのお店があった。その常連客だったのが来住野さん。閉店の知らせを受け、「私の宇宙一好きなお店はどんなお店になるんだろう…」と次に入るお店のオーナーに会いに行くと、初めて会ったとは思えないほど意気投合。すぐにお店に関わるようになった。

飲食店は未経験、コロナ禍でのオープン。地域で長く愛された場所を受け継ぐプレッシャーもあった。しかし高校 2 年生の娘に相談すると、「今まで頑張ってきたんだから、好きなことをやりなよ」と背中を押されたそう。そうしてこの場所は「おむすびカフェ くさびや」に生まれ変わった。

「可愛い古着と美味しいごはん、店員さんもお客さんも優しくいい雰囲気。そういうお店に憧れがありました」

「くさびや」には地元の野菜やお米を使ったメニューも多い。多摩市の青木農園で赤いオクラ、白いゴーヤなど見たことのない野菜に出会い、「こんな面白い野菜が多摩市で採れることをみんなにも知ってほしい!」と思い、取り入れたそう。枝豆としらすのおむすび「おかん」や人気 No.1 おかずの唐揚げは、お米農家のお母さんがつくってくれていたレシピを再現したもの。飽きのこないほっとする味わいで、大人も子どもも安心して食事が楽しめることも愛される理由のひとつだ。

ライブやギャラリーへ行くことも大好きな来住野さん。「くさびや」でもライブや展示、読書会といったさまざまなイベントを開催し、ボードゲームイベントなどお客さんからの提案で企画することも。広々とした店内と個人店だからこそそのフットワークの軽さで地域の人の輪を育んでいる。

「聖蹟はとにかく居心地が良くて、すぐに人の輪に入れますね。うちのお客さんもすぐに人に話しかけます(笑)」

身近な“おいしい・面白い・好き”がぎゅっと詰め込まれたお店で、おむすびを片手にゆったりと過ごしてみれば?



おむすびカフェ くさびや

多摩市関戸 4-34-15
12:00 ~ 20:00 (金は ~ 23 時 / LO は閉店 30 分前まで) 定休日：水、第 2・4 木、日
042-401-8988
Instagram : kusabiyaseiseki

地域みんなでハチミツづくり!

多摩中学校が実践する、豊かな学び・豊かな時間

市役所の売店や小山商店、カフェシナモン、多摩川河川敷でのイベント……多摩市のあちこちで見かけるハチミツ「聖蹟ハニー」をご存じ? 養蜂が子どもたちや地域にもたらす“豊かな育み”とは?

Interview、Text : Momoyo Yuge / Interview : Maki Sudo / Photo : KAEDesign

SEISEKI PEOPLE
6
7
8



養蜂を通して育まれる地域と子どもの結びつき

—まず、多摩中学校での養蜂活動がどのように始まったのか教えてください。
塩田「ハニープロジェクトは今年で4年目を迎えました。4年前、当時の校長先生から、どうしても多摩中で養蜂をやりたいという声があがったんです。先生がやりたいことは支援したいと思って始めました。ゼロからのスタートだったので、資金づくりをしなくてはならなくて、東京多摩ロー

タリークラブをお願いしたり、まちづくりファンドにご支援いただきました」
辺木園「僕は世田谷区から10年前に多摩市に移住してきたのですが、何か地域に関わりたいなと思っていて。たまたま地域の方に塩田さんをご紹介いただいたんです。そうしたらとても居心地が良くて、ずっとお世話になっています」
塩田「本当に気持ちの良い方たちにたくさん協力いただいています。そもそもこの養蜂活動は、文科省から地域と協働で双方向の関わりを持つようにということで、下りてきたものなんです。ですから、地域と学校の協働事業ということで始めました。ハチミツの販売で収益を上げていますが、その収益は学校の備品を買ったり、講演会の費用に充てたりしています。今は私も蜂が可愛くて(笑)。小野くんが遊びに来てくれるのもうれしいです」
小野「聖蹟ハニーは、多摩中のチャレンジ部の活動のひとつです。僕は3年間に籍したんですが、養蜂が楽しくなってきちゃっ



て。高校を探すときも養蜂ができることを探しました」
辺木園「たとえば都心の方でも都市養蜂ってあるんですけど、大体1年で終わっちゃうんですね。でも多摩市の方は興味を持って取り組んでいるから非常に珍しいです。育てるだけではなく、ちゃんと販売するところまで回しているのが素晴らしい」
塩田「生産して販売するところまでやっているの、キャリア教育につながっていますよね。販売するにはどうしたらいいか、パッケージはどういうものがいいかというのを生徒と一緒に考えていく」
—「聖蹟ハニー」の成功の秘訣は?
塩田「私たちが楽しいというのがありますね。それが学校教育に還元されるのがすごくうれしいです」
小野「部長になったときに、文化祭の発表をみんなと考えたんですが、養蜂っていいものなんだというのを同世代に少しでも知ってもらえたのがいい経験でした。僕は採蜜の工程が一番好き。そこまで頑張ってきた努力の結晶だから」
塩田「私たちは地域学校協働本部とい

う事務局を運営していて、現在メンバーは18名。採蜜のときにはこのメンバーをはじめ、地域の方々も手伝ってくれています」
小野「大人の方と関わる機会が増えましたね。高校に入学したら規模が縮小してしまったので大人を頼るカタチに。多摩中では西洋ミツバチだったけれど、高校では日本ミツバチなのでやり方も変わりました。今、高校の先輩たちと一緒に(効率的に蜜を集めやすい)西洋ミツバチを飼おうってプロジェクトを立ち上げようとしています」
辺木園「学園祭のときに急に呼び出されたんですよ(笑)。西洋ミツバチを飼いたいんですって。すごい情熱と夢を持っていますよね。豊かな学びだと思います」
小野「養蜂の魅力は、その技術を身につければ誰でもできる場所。やってみてどう感じるかは人それぞれとは思っています。やっているときの楽しさ、たとえば、蜂のお世話をしながら、それがちゃんと蜂に伝わっているなと思えると、これから頑張っていこうみたいな気持ちになれちゃう。そういう気持ちを育てていければ、これかもずっと続いていくと思います」



聖蹟ハニーは多摩中学校の生徒、地域コーディネーター、多摩市に住む養蜂のプロ、地域の皆さんが連携し、製造から販売までに関わる養蜂プロジェクト。取材当日は多摩中学校の屋上にある養蜂巣箱にいるミツバチの越冬準備。



[写真左から…]
辺木園 慎太さん
多摩市へ移住後、これまで企業養蜂を担当してきた経験を生かし、聖蹟ハニーに携わる。中学卒業後も小野さんのサポートを続けている。
小野 天聖さん
チャレンジ部に3年間所属し、部長として活動。養蜂に興味を持ち、現在は都内の高校で養蜂活動中。取材時は越冬準備のお手伝い。
塩田 明美さん
多摩市の地域コーディネーターとして20年活動。4年前から養蜂活動を開始。伝統文化の授業も15年間担当し文科省からも表彰されている。



【写真上】囃子の練習場・関戸第一倶楽部で思い出を回想する相澤さん。【中】保存会の練習風景。若手メンバーも多く在籍。【下】熱のこもった巡行、熊野神社 例大祭のひとコマ。

“まちへの愛”を育むために 笑顔でもてなす、 関戸囃子保存会のいま・これから

時刻は20時、関戸第一倶楽部からお囃子が聴こえてくる。それぞれの楽器に真剣な眼差しで取り組むのは関戸囃子保存会。会長・相澤祐治さんに話を聞いた。

Interview、Text：Satomi Yoshioka / Photo：Yu Kobayashi

まちへの愛を育ててほしい 次の世代につなげるために

関戸囃子保存会誕生のきっかけは昭和50年代初頭。熊野神社の神輿が復活したことにある。会長の相澤祐治さんが回想する。「昭和30年代以降、交通量の増加で神輿は渡御中止状態。それを再開したのは、消防団員を中心とした関戸の若者たちでした。中学生時代、神輿を担いでいた彼らが、地域を思い、盛り上げて活気を取り戻そうとしたのです」

神輿の復興に続き、「お囃子もやろう」という声が出て結成されたのが、保存会の前身「関戸はやし連」。相澤さんから20歳前後の若者が十数人集まり、練習が始まった。「『府中囃子(番場町)』から2人、『貫井囃子

保存会』から1人の先生を迎えて、『目黒流(お囃子の流派のひとつ)』の手ほどきを受けました。『1年教えるから、あとは自分たちで覚えてほしい』とのことで、最初に教わったのは、おかめ、ひょっとこが踊るポピュラーな『仁羽』でした。『屋台』『国固』といった他の曲は、それ以降、先生から少しずつ教わり、学んでいきました」

初心者だった若者たちが、努力と熱意でお囃子を習得してから約半世紀。熊野神社の例大祭、祭事やイベントで活躍する保存会は、いまや地域の活性化を担う。相澤さんは年齢性別を問わず、多くの弟子を指導し、子どもたちも数多く教えてきた。

「3ヵ月あれば、山車で踊ることができるので、お子さんにはまず踊りを教えます。ただ、どう頑張っても上手くならない場合もある。それ

でもやり続けようとするお子さんに対しては、できる限りフォローします。たとえば、『教えた通りに踊れなくても、最低限音に合わせていれば、それは君の個性だからそのまま伸ばしてもいいよ』と声をかけます。踊りや楽器を通してお子さんには、お囃子の面白さを感じてもらいたい。『自分ではここにいてもいいんだ』『自分でも役に立つんだ』と思えるようになって欲しいとも考えているんです」

前向きな心を育もうとする相澤さんの思いは子どもたちに届いている。その瞳には、力強さと温かさが宿っていた。

保存会メンバー、募集中!

例大祭や地域の祭事などで活躍する保存会では現在、会員を募集中。稽古日は毎週火・土曜の19時30分～21時(関戸第一倶楽部)。小学2年生～。見学は自由なので興味のある方はお気軽にどうぞ。



相澤祐治さん

関戸囃子保存会 会長。50年近くの間、地域活性化や地域愛を育むため、お囃子の指導に尽力。これまで年齢性別を問わず、多くの弟子を育てる。

京王聖蹟桜ヶ丘
SC 便利

明星大学 × せいせき ホップ育成プロジェクト 本格始動中!



今回紹介するのは…
京王聖蹟桜ヶ丘 SC
岡田 陸

せいせき
京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター

京王聖蹟桜ヶ丘 SC では現在、近隣の大学と共同し、地域活性をテーマとした活動に取り組んでいます。2024年5月からは明星大学鶴沢ゼミの皆さんと「明星大学×せいせき ホップ育成プロジェクト」を本格始動中です。今春、京王聖蹟桜ヶ丘 SC 屋上にホップの苗を植えることからスタートし、今年10月、無事育ったホップを学生たちと収穫することができました。育成期間中、学生さんたちが屋上に水やりを訪れてくれたおかげで写真のとおり、すくすくと成長。収穫したホップはオリジナルビール醸造の際に使い、今後のイベントでの販売を目指しています。ホップ育成の様子は「せいせき秋のビールまつり」(2024年10月3日～10月6日)にてパネル展示をしました。近隣にある大学との連携を含め、これからも京王聖蹟桜ヶ丘 SC ではさまざまな方々と共に“地域とのつながり”を育んでいきたいと思っています。



【写真上】「明星大学 × せいせき ホップ育成プロジェクト」のメンバー。【中】手塩にかけて育てたホップを収穫中の学生の皆さん。「毎日の水やりは大変だったけど、元気に育ってくれて嬉しい」と笑みが溢れた。【下】収穫したホップ。目指すはオリジナルビールの完成。

キックオフは2018年 建築設計事務所が考えた 「サクテラス街区3棟」



© Naoomi Kurozumi

「街と建築のデザインを通して社会に貢献する」ことを使命とし、これまで数多くの建築設計を手がけてきた光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所。「サクテラス街区」の外装を担当しながら共用部インテリア・ランドスケープデザインの全体統括を行った稲山さんと、ランドスケープデザインを担当した遠洞さんが大切に続けた思いとは?

稲山「サクテラス3棟は、京王線で新宿方面から来ると最初に多摩市として見える場所になります。その玄関口にふさわしいランドマークを目指し、建築を「単体」ではなく“まちを構成する一つの要素”として捉える視点を大切にしながら、マスタープランを作成しました。我々の計画への

参画は2018年。“RIVER SIDE TERRACE”をコンセプトに掲げ、建物の内外に目の前に広がる多摩川の豊かな自然環境を享受できるさまざまな賑わいの場所を設けました」

遠洞「当マンションに暮らす方はもちろん、商業施設『サクテラスモール』に訪れる地域住民の方々にとっても“憩いの場”になることを目指し、敷地全体で自然豊かな環境を体感できるように心がけました。南側エリアは四季折々に表情を変化させる樹木に囲まれ、敷地の中央に設けられた芝生広場は親子で遊べる開放的な空間になっています。木陰にベンチを配置しているので、多摩川の雄大な流れを感じながら多くの方々に寛いでいただけたらうれしいです」

稲山「春といえば桜。満開に咲いた桜の花を穏やかに眺める人の姿を見たとき、長い時間をかけて本プロジェクトに関わってきたことをうれしく感じました。桜つながりでお話すると、レジデンス内には聖蹟桜ヶ丘とゆかりのある宇宙(そら)桜のモチーフを採り入れているんですよ。市民に愛されるランドマークになったら幸いです」



光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所株式会社
プロジェクトディレクター 稲山 雅大
ランドスケープデザイン室 アソシエイト 遠洞 躍斗



教育機会にセカンドチャンスをと
たしかかな足取りで
根づく
「せいせきの学びの場」

高木実有さん

無料塾「一般社団法人慈有塾」代表理事。普段は多摩市内で公務員として働く、市内在住の3児のママ。抱っこしているのは末娘の華ちゃん。
<https://jiyujuku.net>

もう一度、勉強をやり直したい。こんな風に考える若者たちに無料で“学びの場”を提供する塾がある。「慈有塾」だ。代表理事・高木実有さんが思い描く、教育のあり方とは？

Interview, Text : Hisaco Sato

誰でもやり直せる！
変わらない信念を胸に

ドアを開けると、どこか懐かしい教室の風景。聖蹟桜ヶ丘駅からほど近くにある「慈有塾」は、若者を中心とする貧困等のさまざまな事情により教育機会を得られなかった人たちに、もう一度勉強する機会を無償提供している塾。生徒の多くが高等学校卒業程度認定試験（高認）合格を目指し、日々勉強に取り組んでいる。

代表理事を務める高木実有さんは2008年より個人で活動を開始し、2014年に聖蹟桜ヶ丘に塾を立ち上げ、今年で開校10年を迎えた。現在、多摩市の職員として働きながら、3人の子育て、ライフワークでもある無料塾を運営している。

生徒は首都圏から通い、ボランティアの講師は多摩市を含めさまざまな地域の方で構成。コロナ禍をきっかけにオンラインも展開しているが、基本的には対面のマンツーマンレッスン。生徒は児童養護施設出身者、自らがひとり親などさまざま。努力家が多いが、勉強と真正面から向き合う中で、悪戦苦闘することも。

卒業生は100名を超え、看護師として活躍する人、海外大学へチャレンジする人など主体的な選択を後押ししている。「生徒たちの選択を通して、知らない世界を知ることができるのも楽しい」と、高木さんは微笑む。

これまでを振り返ってみて、「自らのライフステージが変わる中でも、塾を継続するために通いやすい場所として、聖蹟桜ヶ丘に開校しました。ひよんなきっかけですが、ボランティアの講師の方々や、地域で応援してくださる方々に支えられて何とかやってきています。唯一無二の活動であっても、気力・体力が必要です。

高認合格にむけての学習支援は長期戦ですし、試験は年に2回。学びに来る生徒の背景も個性が高く、学ぶ姿勢を養う上での課題もあります。このような状態ではありますが、やめようと思ったことはないです。もしやめてしまったら生徒が他に行くところがなくなってしまふという危機感と、私自身の原体験もあり、意地でも続けていきたいと思っています」と、力強く話す高木さん。

原体験としては、自身も家出少女だったが、勉強が得意で大学進学を果たした事。これまでの価値観ががらりと変わり、明るい未来、選択が広がっていることに驚きを感じたこと。この変化を周りの仲間にもつなげて、学ぶ機会を得ることができれば自暴自棄にならず建設的なキャリア形成につなげられるのではないかと考えた。

そんな強い思いを活動に変換し、続けている高木さん。「どの家に生まれるか子どもは選べない。慈有塾の扉を叩いてくれた子には長い目で応援したい」と思いを語る。

社会変化の大きい中、ますます慈有塾のような存在の必要性は高まりそうだ。



【写真上】慈有塾の学びの場。【下】生活用品や食品、文房具、教材などが寄付によって揃う。



2014年に任意団体「L♡veふちゅう賑わい創出委員会」としてスタートして以来、地域の活性化に資する事業を通して、府中市の地域価値の向上に尽力されている「株式会社まちづくり府中」（一般社団法人を経て2024年4月より株式会社化）の皆さん。写真前列の右から3人目がお話を聞いた廣瀬さん、前列左から2人目が京王電鉄の北田。



府中市で唯一の
都市再生推進法人として
地域に関わる産官学民の
多様な主体と連携し、
地域価値の向上につながる
さまざまな事業に取り組む
株式会社まちづくり府中。
“まちのコーディネーター”
こんな表現がしっくりくる
プロフェッショナル集団だ。
府中 LOVE のわけとは？

まちづくり府中
常務取締役/タウンマネージャー
廣瀬 健
×
京王電鉄
聖蹟桜ヶ丘プロジェクトチーム
北田 明

北田——けやき並木通りや府中スカイナードで開催する「キテキテ府中マルシェ」をはじめ、市内の事業者が講師となる「むさし府中まちゼミ」、府中駅周辺の商業施設と連携した「キテキテ府中」など、幅広く事業を推進するまちづくり府中さんの取り組みを知るにつけ、これだけ多様な事業を推進されていてどのような皆さまなのだろうと思っていました（笑）

廣瀬——府中の地に積み重ねられてきた文化と“いま”の府中の姿を重ね合わせることで、地域に新しい価値を創りだしたいという思いで、これまで多くの協力や支援を受けながら活動してきました。まちの主役は“人”、地域の方々です。まちに暮らす皆さんをはじめ、府中で商いをしている方、「まちを良くしたい」という情熱を持ってプロジェクトを興す方など、府中には魅力的な人が多くいます。私たちの役目は、さまざまな思いと向き合いながら、まち全体の賑わい創出につながる仕組みを地域の方々と共に創っていくことだと思っています。北田——話を聞いていると、まさに“まちのコーディネーター”だと思います。廣瀬——府中で唯一の都市再生推進法人（編集部註・地域のまちづくりを担う法人）であり、行政の補完的機能を担いえる団体とも言えます。例えば、けやき並木通りでマルシェを開催するためには警察や道路管理者等と

の協議が必要です。開催に先立ち、関連各所との密なやりとりも欠かせません。地域に関わるさまざまな団体と連携体制を構築できるのは、公的位置づけのある私たちの強みかもしれませんね。

北田——まちづくり視点の事業の厚み、とても参考になります。現在、京王電鉄社員として関わる一般社団法人聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントで地域のプレイヤーの方々や連携しながら「せいせきカワマチ（多摩川河川敷芝生広場）」の運営を担っています。川のある豊かな日常を多くの方に感じていただくため、取り組みを始めたところですよ。

廣瀬——河川空間の活用で先駆的な取り組みをされていて私たちも注目しています。北田——始まったばかりのプロジェクト（編集部註・2023年10月に「せいせきカワマチ」誕生）ですが、地域に関わるの方々を中心にみんなが活用できる場所になることを目指しています。

廣瀬——共に地域特有の資源を活かして、まちの個性を磨くことで、京王線沿線と一緒に盛り上げていきたいです。北田——府中と聖蹟桜ヶ丘は多摩川を挟んで隣同士です。何かご一緒したいですね。



地域で育む、かわまちづくり



「せいせきカワマチ オープンデー」「せいせきカワマチクラブ」に迫る!

地域の力を活かしたまちづくりを進める、一般社団法人聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメント。「せいせきカワマチ」を舞台にした“コミュニティの醸成”“主体性のある場づくり”など、川のある豊かな日常に向けた取り組みを紹介します!

多摩川河川敷でのんびり

「せいせきカワマチ オープンデー」を開催しました

2024年10月19日・20日の2日間にわたって開催した「せいせきカワマチ オープンデー」は、公募によって集まった、地域で商いや活動をされている方が一体となってつくりあげる共創型マルシェイベント。自然派ワインやフルーツサンド、音楽ライブに多摩市非公認キャラクターに会える企画など、16店舗が出店し、多くの方にご来場いただきました。



「せいせきカワマチ オープンデー」の舞台裏に潜入〜!!

8月下旬

カワマチ ミートアップ

「せいせきカワマチ」の活動に興味のある20名が集まり、イベント経験者によるゲストトークや、実現したいアイデアのブレインストーミングを実施。みんなの“やってみよう!”を共有しました。



10月上旬

出店者募集・準備会

オープンデーの公募で集まった出店者やサポーター14名が参加し、出店テント設置の実践やポップの作成などオープンデー当日に向けた準備を実施しました。



10月19日・20日

せいせきカワマチ オープンデー

ついに本番! 朝から会場設営して10時にオープン。その楽しみ方は人それぞれに。



10月下旬

振り返り会

出店者・サポーター8名が参加し、アンケートをもとにオープンデーの振り返り。今後の「せいせきカワマチ」の活用に向け、出店者コラボレーションアイデアのブレインストーミングを実施しました。

誰でも参加自由!

「せいせきカワマチクラブ」とは?

「せいせきカワマチ」を使いこなして、ひとりでは難しいことも他のメンバーと一緒に取り組むことでやりたいことを実現するためのコミュニティです。今回紹介した舞台裏もクラブメンバーを中心に実施しています。メンバー同士のコミュニケーションを通

じて、やりたいことのマッチングやオープンデー(マルシェイベント)の企画を行っています。オンラインでのコミュニケーションに加え、ミーティング、イベント、交流会など、対面での交流も積極的に実施中です。

問い合わせ先

「せいせきカワマチ」を使って、何かをやりたい方の参加をお待ちしております。せいせきカワマチクラブ、オープンデーに関するお問い合わせは「聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメント」メールアドレスまでお願いします。

seiseki@keio.co.jp

多摩ランタンフェスティバル2024を開催

「多摩ニュータウンミニウォーク」も実施

2024年10月7日から13日まで、多摩ニュータウンの豊ヶ丘・貝取エリアにて「多摩ランタンフェスティバル2024」を開催しました。6回目となる今年のテーマは“日常を照らす”。期間中、日本総合住生活が運営するコミュニティ拠点「J Smile 多摩八角堂」(多摩市豊ヶ丘5-5)では200個のベトナムランタンが秋の夜長をやさしく彩り、同エリアをはじめ、豊ヶ丘商店街や貝取商店街でも地域の皆さんが制作に携わったさまざまなランタンがライトアップされました。

地元若手のまちづくり組織・ニューマチヅクリシャ、有志で集まった地域住民の皆さんのご尽力により、今年は約3.2万人の来場と大盛況。トクトク乗車体験やライブパフォーマンス、隠された宝の文字探しなど、期間中は会場で嗜好を凝らしたさまざまなプログラムを実施、来場した皆さんの笑顔と多く出会うことができました。会場周辺を歩いて巡って多摩ニュータウン

の魅力を見つけてほしい、街並みやUR賃貸住宅の部屋を見て多摩ニュータウンの暮らしをイメージしてほしい、こんな思いから、多摩市とUR都市機構、京王電鉄による出展企画として10月12日・13日の2日間にわたって「多摩ニュータウン ミニウォーク」も実施。会場近辺のおすすめスポットを歩いてもらう企画で、道中にはUR賃貸住宅である多摩ニュータウン豊ヶ丘団地の見学のほか、コミュニティ施設、保育園や商店など暮らしに役立つ施設等を巡るようルートを設定。お陰さまで多くの方々に参加していただく機会となりました。京王電鉄では、今後も地域の皆さまと共に沿線活性化に向けた取り組みを行っていきます。

今回紹介するのは…
京王電鉄
沿線価値創造部
髙田智仁



[写真上] ベトナムランタン200個が異国情緒を演出した「J Smile 多摩八角堂」。
[中] 期間中の地域の商店街の様子。
[下] ミニウォーク出展の様子。

市民ライター募集中!

京王電鉄と情報誌『BALL.』を発行するけやき出版は共同で、聖蹟桜ヶ丘の街の魅力取材・発信し、地域の価値創造を目指す取り組みの1つとして、市民参加型ローカルマガジンの発行を行っています。本誌は、聖蹟桜ヶ丘“People”ガイドをテーマに、毎号1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャー。本誌では、有志の市民ライターとして聖蹟桜ヶ丘の“街の魅力”を深掘りする方々を広く募集しています。

〔問い合わせ先〕

けやき出版
TEL: 042-525-9909 (平日9時~18時)
MAIL: e-info@keyaki-s.co.jp

まちの掲示板

プラネタリウムコンサートやワークショップ、星空観望会等が行われる「第2回スターライトバルコニー in 関戸」を開催。詳細は以下でご確認ください。
日時: 12月13日(金)~12月14日(土)
場所: 関戸公民館市民ロビー、健康センター屋上他
申込: 11月25日(月)10時30分から開始(先着順)
詳細は11月20日『たま広報』をご覧ください。

編集後記

『セイセキ ZINE #5』の発行にあたり、多くの市民の方々のご協力を頂戴しました。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。今号のテーマは「育む人」。聖蹟桜ヶ丘を舞台に、自分らしいまっすぐな想いと向き合いながら、仕事や暮らしを楽しんでいる方々に話を伺い、市民ライターの皆さんと誌面づくりを進めていきました。次号の発行は2025年、早春の頃を予定しています。またお会いしましょう。

市民ライター

安藤賛さん、伊藤千夏さん、大森悠史さん、恩田環さん、片山明子さん、小林ゆうさん、佐藤寿子さん、須藤麻紀さん、松竹陽子さん、弓削桃代さん、吉岡さとみさん、KAEDesignさん